



2020年4月

新年度が始まり、心弾ませている生徒も多い時期だと思います。しかし残念なことに、現在、全世界で新型コロナウイルスが流行っています。外出が制限されストレスを感じている人もいるのではないのでしょうか。ぜひ本を読んで心は豊かであってほしいと感じます。不安を抱きやすいこの時期に、ぜひ読んでいただきたい本をご紹介しますと思います。きっと勇気と愛を感じていただけたと思います。

その本は、今年の干支であるネズミが登場します。『ねずみの騎士デスペローの物語』ケイト・ディカミロ作 ティモシ・バジル・エリング絵 子安亜弥訳 ポプラ社 2004です。4月生まれのハツカネズミのデスペローが主人公のお話です。4部作で構成されています。第1部は、主人公デスペローが誕生してから地下牢に行くまでのお話です。デスペローは、他のハツカネズミと少し見た目が違うのと興味を持つものが違ったため、他のハツカネズミ達から気味悪がられていました。そして、なんとお城に住んでいる人間のピー姫に出会い恋をしてしまうのです。そのため、ハツカネズミ会議で地下牢に行くよう命じられてしまうのです。第2部はキアロスキューロという地下牢に住んでいるドブネズミのお話です。このキアロスキューロも他のドブネズミと違って光に興味を持ってしまうのです。第3部はミゲリー・ソウという女の子のお話です。実は、ピー姫と同じ年。このミゲリー・ソウという少女はかわいそうな生い立ちなのです。なんとお父さんに売られて奴隷として6歳の頃から働かされていたのです。この女の子がお姫さまになりたいという夢を抱きます。そして、お城に入れる奇跡が起きますが、ドブネズミのキアロスキューロが近づいてきて、悪い企みを吹き込まれ…。第4部では、主人公のデスペローが、ピー姫を助けに行くお話です。

私がお話で印象に残ったのは、三つあります。一つ目は、「すべてのできごとは、すべてのほかのできごととつながっているのです。行動にはかならずなんらかの結果がともなうというのは、そういうことです。」という言葉です。責任をもって行動する必要があることを再認識できます。二つ目は、ミゲリー・ソウがお姫さまになる夢を持った時に、「みなさんは、かなうあてのない希望を持ちつづけるのは、悲しいことだと思いますか？それとも、だれにめいわくをかけるわけでもないのだから、心に希望をいだきつづけるのは悪いことではないと思いますか？」という言葉。私は、その思いが原動力となって、ポジティブになったり努力しようとするなら、たとえかなうあてのない希望だとしても持ちつづけていいと感じています。たとえ、希望通りになれなかったとしても、結果よりその過程でどう過ごすかが大切だと思うから。三つ目は、色んな立場であってもどんな場面であっても、大なり小なり光と闇はあるということにこの本を読んでいて改めて気づかされました。そして、周りとは少し違うだけで偏見を持ってはいけないということも再認識できる本でした。

この本は、ナレーションが読み手をこの物語へ入りやすいように語ってくれているので、読みやすいと思います。みなさんも、ぜひこの本を読んで色んなことを感じて取ってほしいです！